

病気による傷つきを抱えた子への寄り添い ～院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なこと～

昭和大学大学院保健医療学研究科 准教授
昭和大学附属病院内学級担当

副島 賢和

ご自分の文化に翻訳を

皆様こんにちは。副島賢和と申します。25年間東京都の公立小学校で教員を務めてきました。終わりの8年間も含めて、現在15年ほど病気のある子どもたちの教育に携わってまいりました。ですので、今日の話は、病気のある子どもたちとの関わりの視点からになります。皆様の周りに病気のある子どもはいますか？学校という場は、基本的にいわゆる健康な子どもたちと関わる場所です。「その話は、入院をしている小学生の話でしょう」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、ただ、病気ではなくても、心や体が傷ついている子どもたちとはきつと関わってこられたのではないのでしょうか。そんな子どもたちのことを思い浮かべながら、「似ている子を知っている」「それは使えそうだ」「そんな子どもたちもいるのか」…とご自分の文化に引き寄せながら、お読みいただくと幸いです。

コロナ禍の状況で

今、皆様の目の前にいる子どもたちは、どのように過ごしていますか？「マスクして！」「触っちゃダメ！」「うつるでしょう！」「大きな声を出さないの！」「集まっちゃダメ！」…周囲から、そんなことを言われているかもしれません。本来子どもたちは、いろいろなものに触れ、声を出し、群れることで育っていく存在です。私たち教師もそんなことを仕掛け

ながら、子どもたちの成長や発達を保障してきたのではないのでしょうか。それを静止することを行わなければならない先生方は、本当に苦しいと思います。そして、このコロナ禍では、全ての人が当事者です。自分自身も守っていく必要があります。

ある子が言いました。「ニュースが怖いんだよね」。その子はおそらく、大人のように、ニュースの内容を理解しているわけではないでしょう。その子が怖がっているのは、ニュースの内容というよりも、そのニュースを見て不安がっている大人の後ろ姿が怖いのかもしれません。そんな時、多くの子どもたちは、我慢をします。頑張ります。そして不安に蓋をします。大人に余裕がない時は、余計にそのような行動をします。これでは心のエネルギーがたまりません。しかし、多くの子どもたちは、この状況を誰かのせいにしてしまいません。もっと我慢しなければ、もっと頑張らなければ、と自責の念をもちます。そして、それがうまくいかなかった時、「みんなはできているのに、自分はできない」と劣等感を持つ子がいます。「無力な私は、ダメな存在」そう思っている子どもたちはとても孤独を感じています。ひとりぼっちという考えをもってしまいます。

令和3年2月に文部科学省から「令和2年度児童生徒の自殺者数に関する基礎資料」が出されました。平成28年と令和2年を比べると自殺をした、小中高校

生 の 人 数 は、289人 から 479人 と 約 1.7倍 に 増 っ て い ます。それ だけ、つらさを 抱 っ て い る 子 ども たち が 増 っ て い る とい う こ と な の だ ろ う と 考 え ます。

そ っ な 傷 つ き を 抱 っ た 子 ども たち の 回 復 の た め に、私 たち は 何 が でき る で し ょ う か。病 弱 教 育 と いう 病 気 の あ る 子 ども たち へ の 教 育 の 視 点 か ら、考 え を お 伝 え い た し ます。

学びの保障による成長・回復

「病 気 を 抱 っ た 子 ども たち に 教 育 は 必 要 で し ょ う か？」と 尋 ね ら れ た ら、皆 様 は な ん と お 答 え い た だ け る で し ょ う か？ 子 ども か ら 直 接、「私 は 病 気 が あ る の だ け ど、勉 強 っ て や ら な き ゃ い け な い の？ 教 育 っ て 必 要 な の？」と 尋 ね ら れ た ら、ど う お 返 事 さ れ ます か？

多 くの 教 員 は、「必 要 で あ る」と お 答 え く だ さ い ます。で も、実 際 に 入 院 し て い る 子 ども たち を 目 の 前 に す る と、ほ と ん どの 先 生 は、「こ ん な 時 に 勉 強 な ん て い い か ら。今 は ゆ っ く り 休 ん で、1日 も 早 く 治 し て く だ さ い。先 生 も ク ラ ス の み ん な も 待 っ て い ます か ら ね」と 言 う こ と が 変 わ り ます。私 も 小 学 校 の 担 任 を し て い る と き は、連 絡 帳 に そ う 書 い て い ました。た だ、医 療 の 進 歩 が 進 ん だ 現 在、そ の 言 葉 が 通 用 し な い 子 ども たち が 増 っ て い る こ と も 事 実 で す。医 療 的 ケ ア を 受 け て い る 子 ども 等、医 療 と つ な が れ ば、でき る こ と が 増 す 子 ども たち が 増 っ て い る の で す。

で は そ の よ う な 子 ども たち の、成 長 ・ 回 復 の た め に 必 要 な こ と は 何 で し ょ う か。

私 は、病 気 や 喪 失 の た め に 傷 つ い た 自 尊 感 情 (肯 定 的 な 自 己 イ メ ー ジ) を 育 む こ と が そ の 一 つ で あ る と 考 え て い ます。

自 尊 感 情 に は、でき る ・ わ か る と いう 「社 会 的 自 尊 感 情」で あ る Doing と 自 分 を 大 切 に 思 う 「基 本 的 自 尊 感 情」で あ る Being が あ り ます (近 藤 2010)。そ の た め に は、「S・C・H」が 大 切 で あ る と 私 は 考 え て 子 ども たち と 関 わ っ て い ます。こ の 「S・C・H」は、「Safety・Challenge・Hope」の 頭 字 文 字 で す。そ し て、SCH は SCHOOL の 最 初 の 3 文 字 で も あ り ます。

Safety = 安全・安心

院 内 学 級 に 初 め て き て く れ た 子 ども たち が よ く や る こ と が あ り ます。そ れ は、先 に 学 級 に 通 っ て い る 子 ども たち を ちょ こ っ と だ け 傷 つ け る こ と で す。傷 つ け る と 言 っ て も、叩 い た り 蹴 っ た り す る わ け で は あ り ませ ん。他 の 子 が や っ て い る 勉 強 を 見 て、「俺、そ の 勉 強 も う 学 校 で や っ た」と か、折 り 紙 を や っ て い る 子 に、「私 そ れ 得 意、貸 し て」と 言 い な が ら、ア ウ ェ ー 感 た っ ぷ り の、こ の 集 団 の 中 で の 自 分 の ポ ジ シ ョ ン を 確 保 し に 行 こ う と す る の で す。そ ん な 時 私 は、「先 生 ね、あ な た と こ の 子 を 比 べ て い ませ ん よ」と いう こ と を し っ か り と 伝 え ます。周 り と 比 べ ら れ な い と いう こ と を 受 け 取 る と、子 ども たち は、本 当 に 柔 ら か く、や さ し く な り ます。一 人 ひ と り が 大 切 に さ れ る 人 や 場 が あ る こ と を 伝 え て い き ます。

小 学 2年 生 の 子 が、小 学 6年 生 の 子 に 言 っ た 言 葉 が あ り ます。6年 生 の 子 は、何 回 か 入 退 院 を 繰 り 返 し、発 達 の 課 題 も 大 き い お 子 さ ん で、掛 け 算 の 九九 に 苦 手 な 段 が あ り ました。そ の 子 は、担 任 の 先 生 が 送 っ て き て く れ た 算 数 の プ リ ン ト に 取 り 組 ん で い ました。普 段 で し た ら、九 九 表 の ヒ ン ト カ ー ド を す ぐ に も ら い た が る の で す が、そ の 日 は「い ら な い」と 言

いました。目の前で、2年生の子が九九を学習しているのです。プライドが許さなかったのだと思います。でもそうすると、問題はなかなか解けない。頭を掻きむしり、プリントをグシャとしようとしたときに、「お兄ちゃん、大丈夫。さいかち学級には失敗はないんだから」と2年生の子が言いました。6年生のその子は、プリントの皺を伸ばし、また問題を解き始めたのです。もちろん、さいかち学級にも失敗はたくさんあります。でも、あの子たちが、最大の失敗だと考えているのは、病気をしたこと、入院をしたこと、周りに迷惑をかけていることです。だから、失敗だと思えることがたくさんあるかもしれないけれど、一緒にクリアしていこう。失敗をしてもあなたはダメじゃないよ、ということを子どもたちに伝えていきます。2年生の子は、私の考えを汲み取ってくれていたのだと感謝をしました。

安全と安心を子どもたちが感じるためには、自分が今、感じている感情や感覚を大切にしてもらい関わりが必要です。そのことが、子どもたちに伝わる声かけや学習を行います。

図工の時間に子どもたちと紙粘土を使ってお弁当作りをしました。「副島先生、子どもたちの中には、食止めなどの食事の制限があるのに、ご飯を教材にされるのですか？怒ったり、泣いたり、暴れたりする子がいませんか？」と医療者から尋ねられました。「そういうお子さんがいるから、この学習をするんですよ」とお伝えをしました。ご飯を食べることができなくて、悲しい気持ちや悔しい気持ちになることは当たり前のことです。怖いのは、その当たり前の感情に蓋をして、「食べられなくても平気」「治療中なんだ

からしょうがない」と、自分に少しずつ嘘をつくことです。蓋をした感情は消えるわけではありません。溜まり過ぎたら溢れ出します。それは、とても危険なことです。だから、「今、何でも食べていいと言われたら、何を食べたい？それを紙粘土で作ってみようか」と取り組みます。作っている途中で、悲しくなって、作品を潰す子がいます。でもそれが本当の気持ちです。そんな気持ちを持ってあなたもあなたはダメじゃないよということを伝えていきます。

Challenge = 選択・挑戦

安全と安心を感じられた子どもたちは、失敗をすることができます。間違えても、うまくいなくても、自分はダメな存在ではないと思えます。そして、本当の選択や挑戦ができるようになります。入院したての子どもに「何をやりたいかな？」と問うと、「別に何でもいい」と答える子が多いです。「これとこれ、どっちが良いですか？」と尋ねると、「先生が決めてよ」と返事をする子が多いのです。選ぶということはエネルギーのいることです。特に、大人の顔色を伺いながら、物事を決めてきた子にとって、本当に自分で選ぶのはなかなか難しいことです。「この人はどっちを選んで欲しいと思っているのか」「今、この状況ではどっちを選ぶと良いのか」失敗できないと考えている子どもたちがいます。受け身なのです。

入院・治療をするということは、患者であることを求められます。受け身の存在であることを求められます。でも、子どもは本来、今を生きている存在であり、自発性の高い存在です。そのことが発揮

されたときに、子どもたちにはエネルギーが貯まります。治療に向かうエネルギーを貯めるためにも、院内学級にきてくれたり、私たち教師が関わったりするときは、少しでもその子の好きなことややりたいことを保障していく必要があります。「患者であるあの子たちが、子どもに戻る時間や空間を作ること」。そのことを大切にしています。

いききたいな

しゅうぎょうしきもいけなくて

しぎょうしきもいけなくて

ちょっといや

ちゃんとはじめられなくて

ちょっといや

でもここならできる

小学1年生の子が教えてくれた言葉です。この子は、12月の中旬に入院をして来ました。その時期ですから、学校の二学期の終業式には出席をすることができませんでした。クリスマスは、ベッドから下りてはいけませんでした。お正月は外泊の許可は出ませんでした。三学期の始業式は、「ぜったい、学校に行きたい」と治療を続けていた子です。でも、始業式の日までに、退院はできませんでした。だから、院内学級にきてもらって、始業式を行いました。始業式が終わった後に、彼女が伝えてくれた言葉を一緒に詩にしました。「ちょっといや」という言葉を使っていましたが、本当に悲しそうな悔しそうな表情でした。小学1年生の子どもでも、「ちゃんとはじめる」ことを大切にしているのだな、できる・わかるを保障

することの大切さを感じました。

Hope = 希望

たとえ、うまくいかなくても、失敗をしても、ゲームに負けても…子どもたちから、「今日、楽しかった」という言葉をもたらすことがあります。そして「明日、これをやりたい」という発言が出る時がきます。そんなときは、エネルギーが貯まってきたことを感じます。そして初めて、「退院したら、どうしたいかな？」という質問が届くようになります。今日を拡充できた時、やっと明日や未来のことを考えられるようになるのだということを子どもたちから教わりました。将来の目標を持たせることよりも、まず今日1日を大切に過ごすことが、傷つきのある子どもたちには必要であると考えています。

「おやくにたてればよろこんで」と教えてくれた小学4年生の子がいます。この子は、重篤な病気の治療をしていましたが、お医者さんからは、「これ以上の治療ができない」と言われていた子でした。だから、「調子の良いときはお家で過ごそう」ということになっていました。その子が体調を崩して、再入院をして来ました。ベッドサイド学習を行っていたのですが、1時間だけ教室に行く許可が出た日がありました。絵を描く事が大好きだったお子さんだったので「虹の絵を描こう」という授業にしました。その子が描いてくれた虹の絵はとても明るくて素敵でした。「必ず、お家に持って帰ろうね」と約束をしました。ただ、その子の素敵な絵が欲しくて、「教室に飾る絵を描いてくれるとうれしいな」と伝えたと、おやくにたてればよろこんで」という言葉をもたらしました。結局、絵を描

いてもらうだけの時間は残されていませんでしたが、小学4年生の子からこんな素敵な言葉をもらいました。命のリスクの高いお子さんは、そのことに気付いている子がいます。でもそれが今日だとは思っていません。明日のことを考えるエネルギーが貯まる関わりをしたいと考えています。

学ぶことは生きること

子どもたちにとって、「学ぶことは生きること」と考えています。学びは子どもの日常であり、たとえ子どもがどんな状態であっても学ぶことは当たり前のことです。幼稚園の先生や保育士さんたちは、「遊ぶことは生きること」とおっしゃるかもしれません。私は、子どもの「学び」を保障するために、子どもたちと関わりを続けています。この関わりを続けるために必要なことの大きな一つは、「チームで関わること」です。それも、「子どももチームの一員に入れたチームを作ること」です。子どもを真ん中において、という考え方もわかります。私も以前は

そう言っていました。しかし、子どもの権利を守るためにも、今以上に子どもの声を聴く必要があるでしょう。そのためにも、子どももチームの一員にする。そして、真ん中に置くのは、それぞれのメンバーが抱えた困難や課題にする必要があるのではないのでしょうか。

誰かのつらさや悲しさを受け取るのは、簡単なことではありません。だからこそ、私たち自身の感情を受け取ってくれる仲間を作っていく必要があります。その仲間と、自分の少し黒いところも含めて、話ができる時間と空間が大切でしょう。そして大人が助け合っている姿を子どもに見せていきたいと思うのです。それが子どもたちへの大きな贈り物になると考えています。

参考文献

近藤卓.

自尊感情と共有体験の心理学. 金子書房. 2010.

副島賢和.

あのね、ほんとうはね～言葉の向こうの子どもの気持ち～. へるす出版. 2021.

副島 賢和 (そえじま まさかず)

1966年、福岡県生まれ。1989年、都留文科大学卒業。同年、東京都公立小学校教員として採用され、以後25年間、都立公立小学校学級担任として勤務。1999年、東京都の派遣研修で、在職のまま東京学芸大学大学院にて心理学を学ぶ。

2006～2013年品川区立清水台小学校さいかち学級(昭和大学病院内)担任。2014年4月より現職。

2009年、ドラマ『赤鼻のセンセイ』(日本テレビ)のモチーフとなる。

2011年、『プロフェッショナル仕事の流儀』(NHK総合)に出演。

2020年、YouTube「あかはなそえじ・風のたより」

<https://www.youtube.com/watch?v=ndP0Irhg8k>

・学校心理士スーパーバイザー

・ホスピタル・クラウン

・北海道・横浜こどものホスピスプロジェクト応援アンバサダー

・TSURUMI, 東京こどもホスピスアドバイザー

・日本育療学会理事

・NPO 法人 YourSchool 理事

・NPO 法人元気プログラム作成委員会理事

